

第59図 ST001 平・断面図、出土遺物

196は弥生土器高杯。脚部と杯部の接合部付近である。脚部には3箇所穿孔が残り、全体では4箇所に穿孔すると考えられる。弥生時代後期中葉に相当する。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉である。

**SK111(第57図)**

I区北部で検出した土坑である。SK110により北側の一部が消失する。楕円形で長軸1.58m、短軸0.75m、深さ10cmである。埋土中からは弥生時代後期と考えられる土器小片が出土した。

遺構の重複関係ではSK110より古い、出土遺物からは弥生時代後期に収まると考えられる。

**SK113(第58図)**

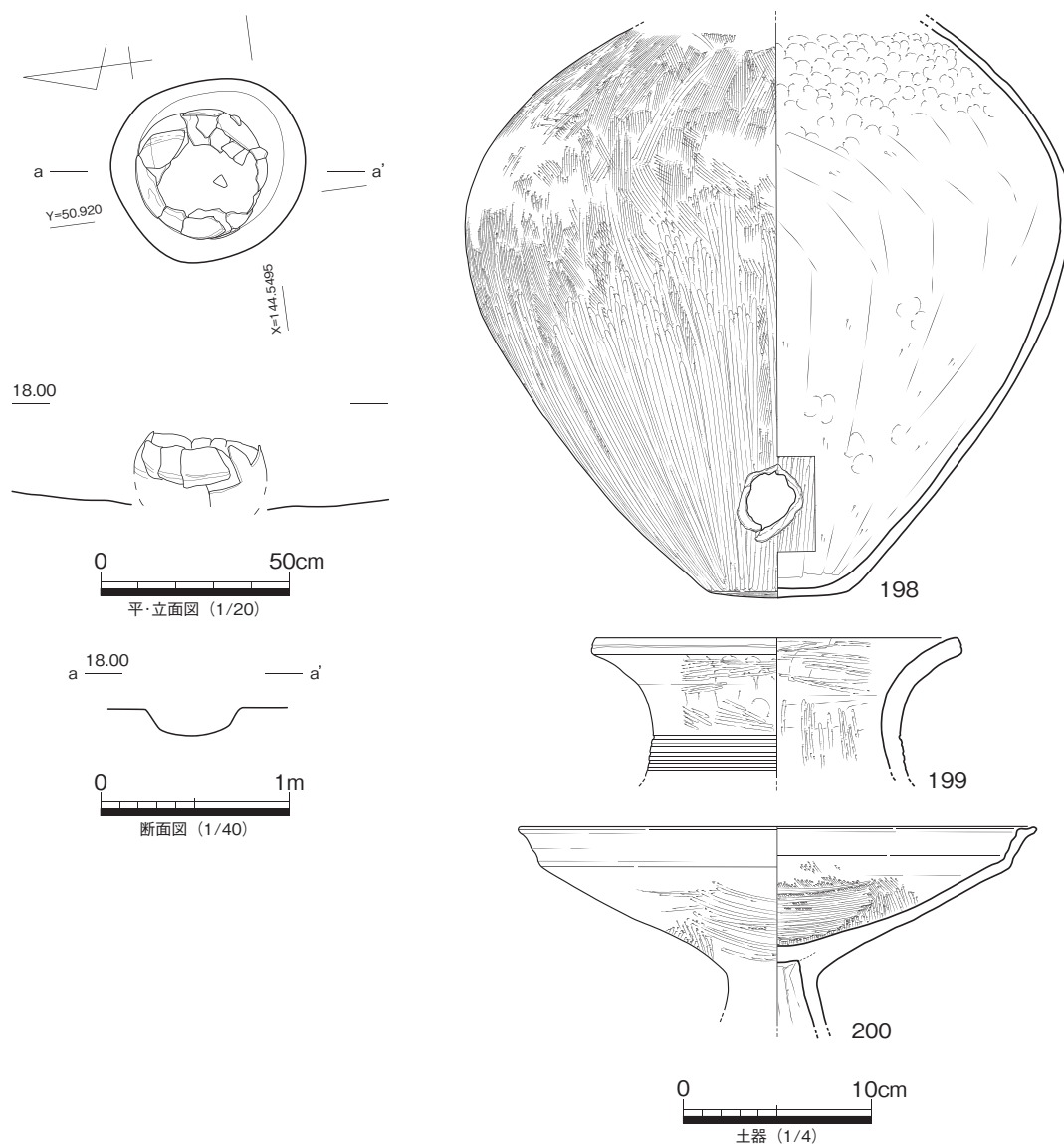
I区北部で検出した土坑である。楕円形で長軸1.00m、短軸0.58m、深さ15cmである。

埋土中からは弥生時代後期と考えられる高杯小片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期である。

⑤墓

**ST001(第59図)**



第60図 ST002 平・断面図、出土遺物

I区北部で検出した。壺を据える土坑はほぼ円形であるが、東肩は攪乱により消失する。直径90cm程度、深さ24cm、埋土は灰色細砂質土（ベース混）である。中には壺が横向きに据えられていたが、体部上半部より上部1/2強は削平により失われる。胴部最大径約59cmを測り、高さ54cm残る。壺内の埋土を洗浄したところ、ほかに遺物は出土しなかったが、壺の埋納状況により壺棺墓と考えられる。

197は弥生土器壺。埋納されていたものである。弥生時代後期中葉に相当する。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉である。

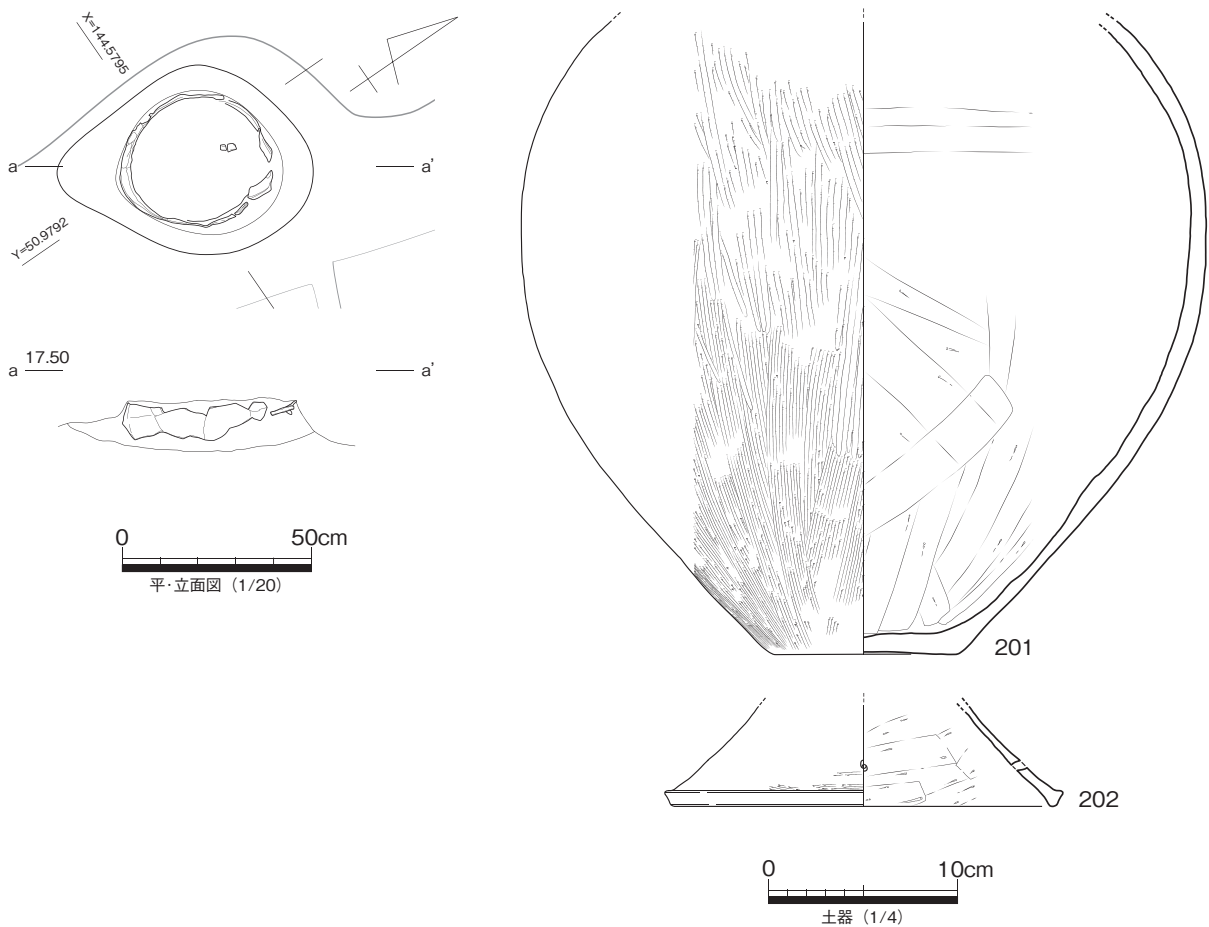
**ST002(第60図)**

I区南部で検出した。SD103の上面で検出した。壺を据える土坑はほぼ円形で、直径56cm、深さ17cm程度である。中には体部上部より上を打ち欠いた壺が斜めに据えられ、その口部分に逆向きにした高杯杯部を被せていた。壺内部の埋土を洗浄したところ遺物は出土しなかったが、出土状況により壺棺墓と考えられる。壺の胴部最大径32.5cm程度、高さは30cm程度残る。同じ壺棺墓であるST003とはほぼ同規模、ST001に比べては半分強の大きさである。

198～200は弥生土器である。198は壺。壺棺に使用したもの。体部下部1ヶ所に穿孔する。199は壺口縁部。頸部に5条のヘラ描き沈線を巡らせる。弥生時代前期II a期の遺物でSD103からの混入と考えられる。200は高杯。杯部内外面とも4分割程度のヘラミガキを施す。壺の蓋にしたもので、脚部を欠く。香東川流域産。198・200は弥生時代後期中葉に相当する。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉と考えられる。

**ST003(第61図)**



第61図 ST003 平・断面図、出土遺物

Ⅲ区北西部、SD302の上面で検出した。壺を据える土抗は楕円形で長軸65cm、短軸48cm、深さ13cmである。壺が横向きに埋納された状態で出土した。上部1/2以上が削平により失われる。壺の胴部最大径は37cm、高さは35cm残り、大きさはST002から出土したものと同程度である。壺内の埋土を洗浄したところ他に遺物は出土しなかったが、出土状況から壺棺墓と考えられる。

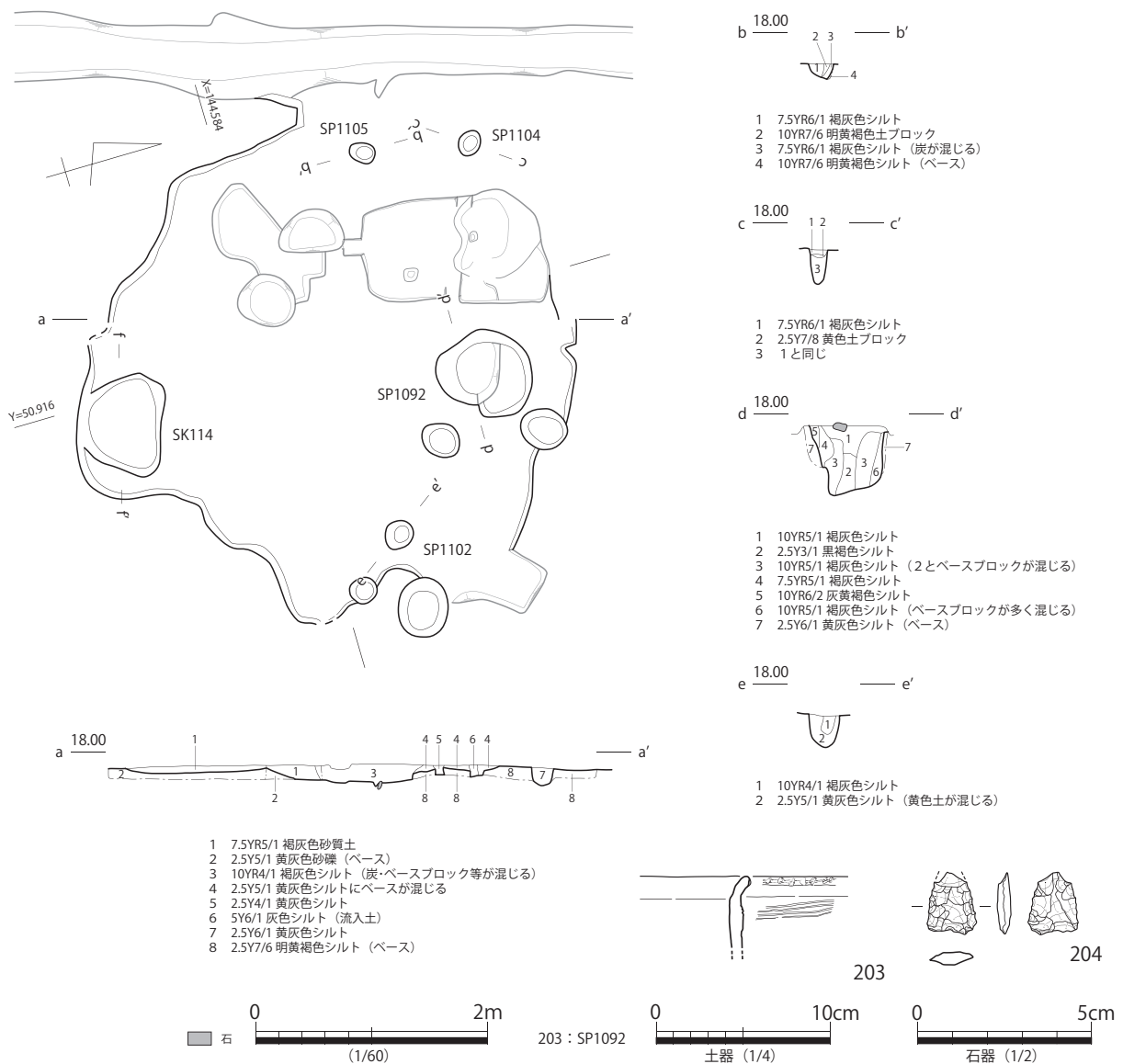
201・202は弥生土器である。201は壺体部。202は高杯脚部小片。ともに弥生時代後期中葉に相当する。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉である。

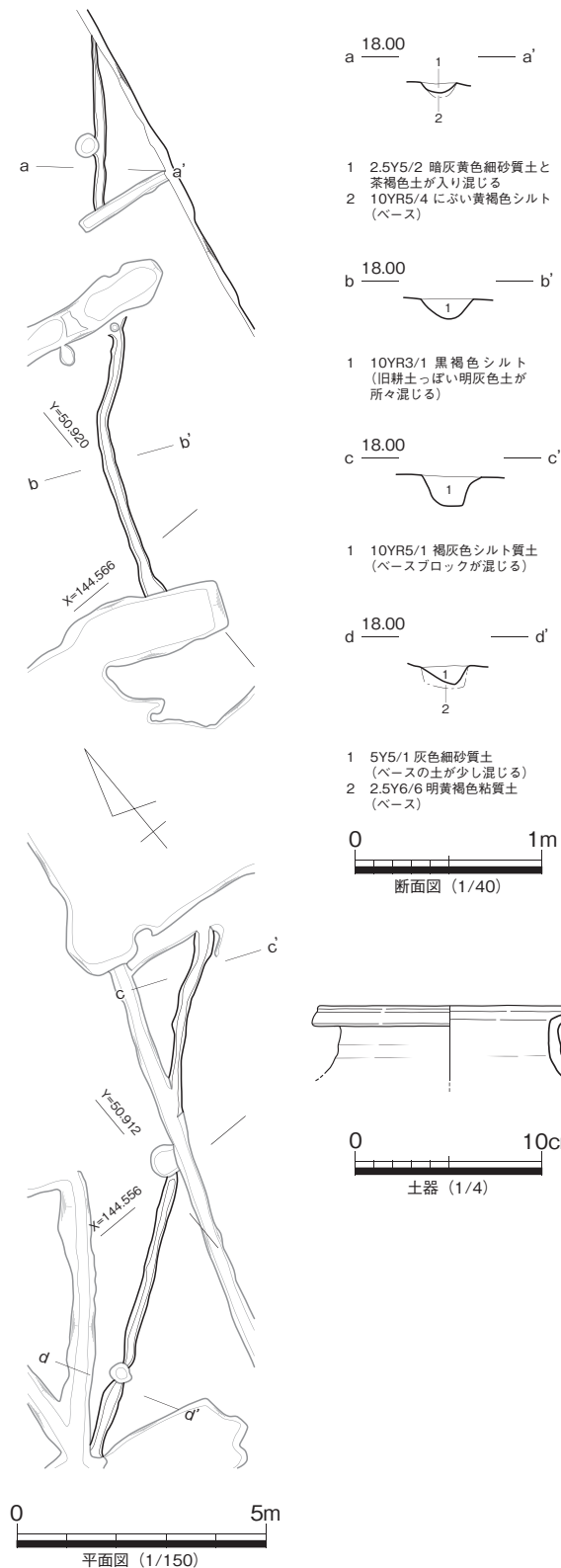
⑥性格不明遺構

SX101(第62図)

I区北端で検出した不整形の落ち込みである。直径3.95m程度、深さ40cm程度である。埋土は褐灰色砂質土またはシルトで炭が混じる。埋土中からは弥生土器小片が出土した。弥生土器には後期のもの



第62図 SX101 平・断面図、出土遺物



第63図 SD102 平・断面図、出土遺物

が含まれるが、大半は小片のため詳細は不明である。

203はSX101内部のSP1092から出土した。弥生土器甕小片。口縁端部は刻み目を、体部にはヘラ描き沈線を3条施す。弥生時代前期の遺物で混入と考えられる。204はSX101部分から出土した。サヌカイト製打製石鏃。平基式。

遺構の時期は弥生時代後期の遺物の小片が出土したことから弥生時代後期とした。

⑦溝

SD102(第63図)

I区南西から北東へ向く溝である。I区より東では不明である。検出長19.7m、幅25cm、深さ10～16cmである。

埋土中からは弥生土器小片がわずかに出土した。弥生時代前期と後期の土器を含むが、周囲に前期の遺構は多く混入の可能性が考えられる一方、後期の遺構はほとんどなく混入が考えにくいことから弥生時代後期の溝とした。

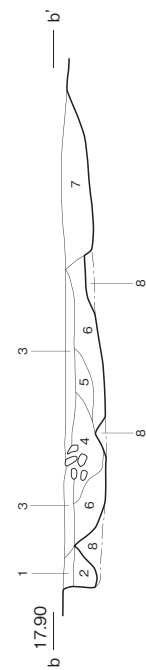
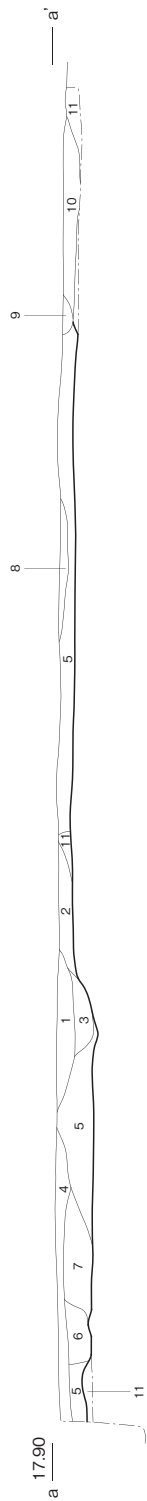
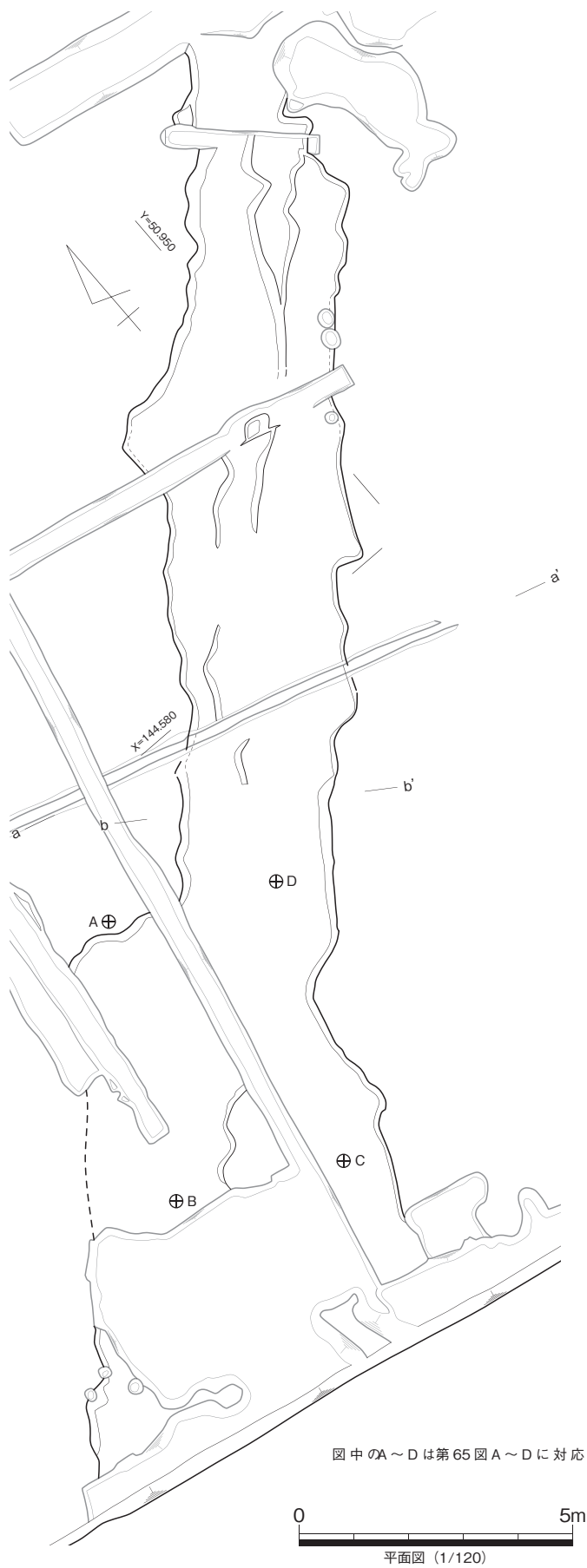
205は弥生土器広口壺。香東川流域産土器。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉と考えられる。

SD205(第64図～第68図)

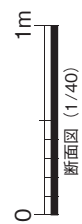
II区西部で検出した溝である。南南西から北北東を指し、後述するSD301とほぼ並行する。検出長25m、幅285cm、深さ22cmを測る。I区では延長部は確認できなかった。II区南部で溝が西側へ幅広くなり、その場所から弥生土器が集中して出土した。

206～259は弥生土器である。206～208は長頸広口壺である。いずれも胎土中に角閃石粒を多量に含む、香東川下流域産土器である。209～222は甕。209・210・219～222以外は、角閃石粒を多量に含む香東川下流域産の甕で、209・210はその模倣形態とみられる。222は、輝石とみられる黒色鉱物粒を多量に含む。223



- a-a'
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
  - 2 10YR5/2 灰黄褐色シルト
  - 3 3と10YR3/1 黒褐色シルトの混じったような土
  - 4 2.5Y5/1 黄灰色砂粘質土
  - 5 7.5YR4/1 黄灰色砂粘質土
  - 6 2.5Y5/1 黄灰色シルト
  - 7 10YR5/2 灰黄褐色シルト
  - 8 10YR3/1 黒褐色粘質土
  - 9 10YR4/1 黒褐色粘質土
  - 10 10YR5/1 黒灰色粘質土
  - 11 2.5Y7/6 明黄褐色シルト (ベース)

- b-b'
- 1 10YR4/1 褐灰色細砂基シルト (明褐色土が均等に混入)
  - 2 10YR5/1 褐灰色シルト (黄色土が混じる)
  - 3 10YR3/1 褐灰色砂粘質土
  - 4 10YR3/1 黒褐色シルト
  - 5 10YR4/1 褐灰色シルト
  - 6 10YR5/2 灰黄褐色シルト
  - 7 10YR5/1 褐灰色シルト (黄色土が混じる)
  - 8 2.5Y7/6 明黄褐色シルト (ベース)



第64図 SD205 平・断面図



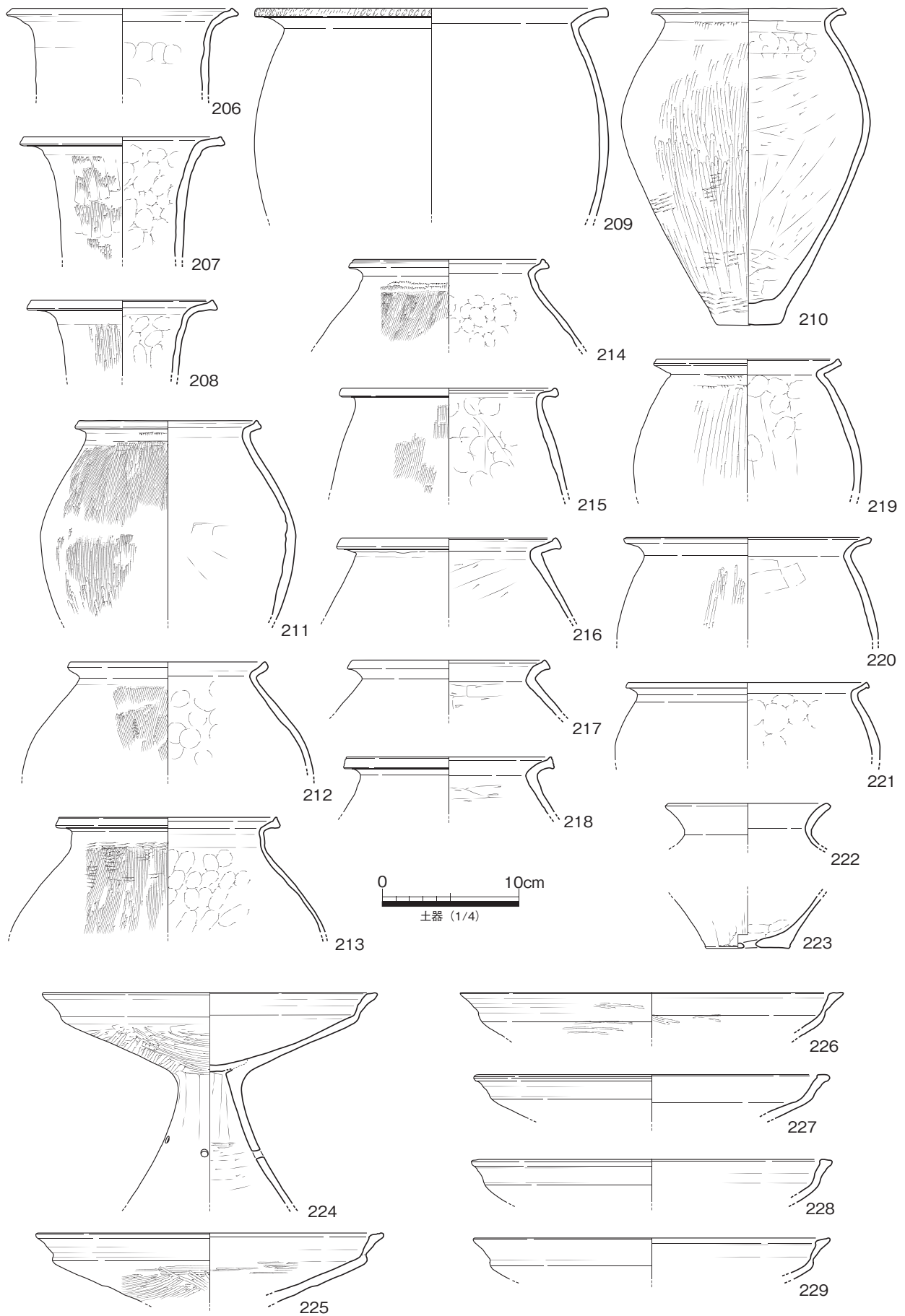
第65図 SD205 遺物出土状況

図中のA～Dは第64図のA～Dに対応

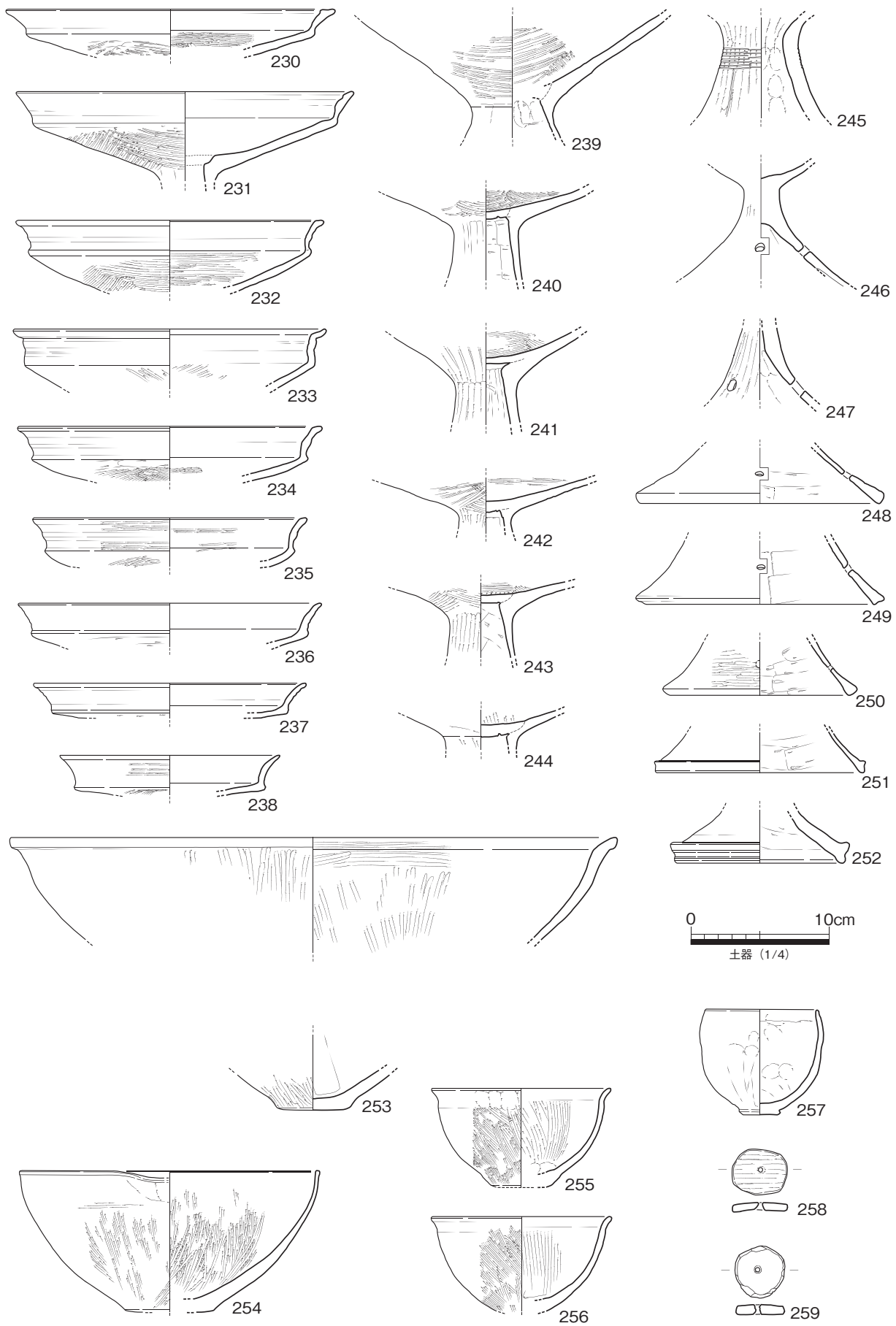
0 50cm  
(1/20)



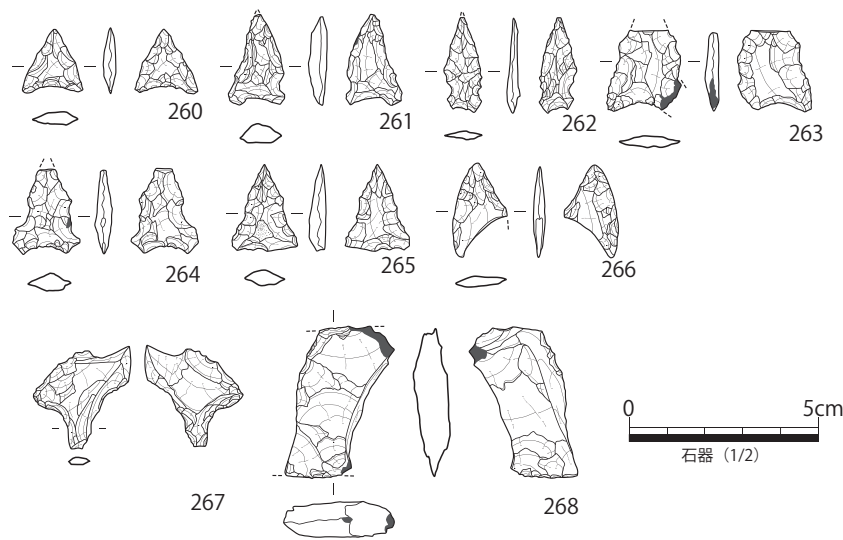




第 66 図 SD205 出土遺物 (1)



第 67 図 SD205 出土遺物 (2)

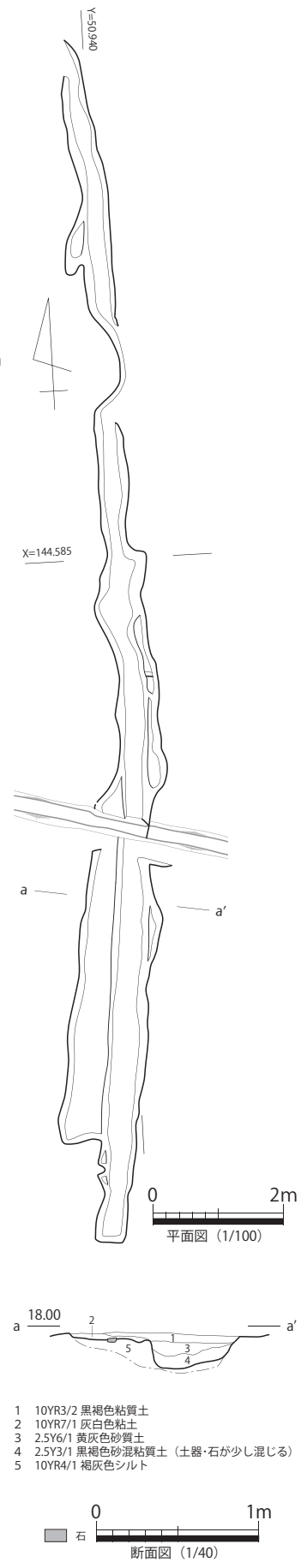


第68図 SD205 出土遺物(3)

は甑とみられる底部片で、底部中央に長径0.8cmの円孔を焼成後に穿つ。224～252は高杯である。224～244・250・251は香東川下流域産の高杯。口縁部の小片には鉢の可能性のあるものが含まれる。口縁部や脚裾部に顕著な個体差を認め、口縁部を拡張しない236～238は、時期的にやや新しく位置付けられる可能性がある。また、脚裾部を上下に大きく拡張し、端面に1条の凹線を施す252は、後期前葉に遡る。245は脚部外面に多条の櫛描沈線文で飾る脚部片である。246・247は、脚裾部に3方向の円形透孔を穿つ。253・254は中形鉢、255～257は小形鉢である。中形鉢には、小さく外反して開く口縁部を有する253と、直口形態の254があり、いずれも小さく突出した平底を有する。小型鉢にも同様に、口縁部に2形態が認められ、255・256は同一個体の可能性がある。258・259は、土器体部片を転用した紡錘車で、中央に径0.4cmの円孔を穿つ。

これらの出土遺物は、甕を中心として細部形態にバリエーションが認められるが、基本的な形態や調整手法は共通し、出土状況から一括性の高い遺物群と捉えることができる。高杯の口縁端部や脚裾部の形状から弥生時代後期中葉と考えられる。搬入土器である269や295の年代とも矛盾しないと考えられる。

260～266は、サヌカイト製の打製石鏃である。261・264は器形が不整形で厚く、未成品の可能性もある。265は一部に自然面を残す。267は打製の石錐。先端部を折損する。また図上端に敲打による潰れが認められ、表裏面が弱く磨滅していることから、打製石庖丁等の転用の可能性がある。268は楔形石器の碎片。表裏面が磨滅することから、本資料も転用品であろう。



第69図 SD207 平・断面図

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉と考えられる。

#### SD207(第69図)

Ⅱ区西端付近で検出した溝である。溝の南端付近でSD205と重複し、切り合い関係によりSD207が新しいと考えられる。幅55cm、深さ25cmで、溝の南半部は西側に約50cmほど浅く段状に広がる。埋土中からは弥生土器甕小片が出土した。

遺構の時期は、遺構の重複関係によりSD205より新しいこと、弥生土器小片が出土していることから弥生時代後期中葉以降で弥生時代後期に収まると考えられる。

#### SD301(第68～79図)

調査区東端部、Ⅲ・Ⅳ区で検出した南北直線溝である。流路方向をN41.67°Eに配し、南北両端は調査区外へ延長し、29.5mを検出した。検出面幅1.92～2.58m、残存深0.31～0.41mをそれぞれ測り、断面形は緩やかに掘り込まれた皿状ないしは逆台形状を呈する。溝底面の標高は、北端部で16.79m、南端部で17.02mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は7～8層程度に細分され、主として褐色系シルトが堆積し、明瞭な水成堆積層は認めない。また、北半部の埋土の堆積状況より、最低でも3回の改修の可能性が考えられ、比較的長期間維持された可能性が考えられる。なお、最終改修前の堆積層は、溝北半部にのみ確認され、Ⅳ区では最終改修時に削奪され残存しない。遺物は、この最終改修時に堆積層(第70図1層)中より、部分的に多量の礫を伴い出土した。Ⅳ区での出土状況(第71図)に示されるように、完形に近く復元される個体も多く、概ね2～3群程度に分かれて投棄されたと考えられ、本層堆積中の時期幅を有する良好な一括資料と捉えられる。

遺物は、28ℓ入りコンテナ20箱出土した。大半は弥生土器である。269・270・273・278・284・288・289・291～293・295・297・299～302・305・306・310～312・323・325・326・331～335・337・342・343・345～348・352・354・355・358・362・366～368・371～382・384～386・388～390・398・399・403・411・413・415・420・424～426・431～434・437・445～447・449・451・452・456・457・461・462がⅣ区出土の遺物である。

269～454は弥生土器である。269・281・370・373は広口壺である。269は、垂下口縁の端面に多条の凹線を施し、円形浮文で飾る。強く張った球胴の体部に、強く突出した円盤状の底部が付す。粗粒の角閃石粒を多量に含むいわゆる生駒西麓産の土器で、搬入資料である。270は短頸広口壺で、粗粒の雲母粒がやや目立つ。271・272は、中期の無頸壺の系譜下にある広口壺で、頸部に径7mm程度の円孔を穿つ。271は微量の有色鉱物細粒を、272は粗粒の黒雲母粒を若干量含む。いずれも香東川下流域産の胎土とは異なる。

273～281は、直立ないしはやや内傾する頸部を有する広口壺である。口縁端部や頸部の形状に若干の個体差を認める。275～278は胎土中に角閃石粒を含む香東川下流域産土器である。

282～290・294は長頸広口壺。いずれも胎土中に角閃石粒を含む。282は、垂下する口縁部端面に上下2段に竹管文を施すもので、河内産と考えられる。283～288は、強く折り返した口縁部の端部を上方へ摘み上げ、内傾する端面を作る香東川下流域産の壺である。289は、胎土にやや違和感があるが、在地産とみてよいだろう。290は、頸基部が太く直線的に立ち上がる頸部を有し、河内産の可能性はある。294は体～底部片で、少量の有色鉱物を含み、高松平野周縁部産の可能性はある。

293は、細頸壺の体部小片で、外面はミガキ調整が卓越する。香東川下流域産の土器である。295も細頸壺の体部片とみられ、体部中央に2条の断面矩形の突帯を貼付し、その間に竹管文を配する。吉備

産とみられる。

296・297・383 は、安定した平底を有する広口壺等の底部片で、296・297 は香東川下流域産土器、383 はその模倣品の可能性がある。

299～369・371・372・374～378 は甕である。299・301～306・308～316・318～328・330・331・333・335～338・340・342～346・348～351・354～356・358～362 等は、胎土中に角閃石粒を含む香東川下流域産甕である。口縁端部を上方へ摘み上げ、内傾する端面を有するもの（302等）や、端部を上下に拡張し、端面に浅い凹線を施すもの（336、359等）等、細部にヴァリエーションを認める。300・307・317・329・334・339・347・352・357・363・366 等は、胎土中に粗粒の黒雲母粒がやや目立つ資料で、体部外面に左上がりのハケ調整を施し（334・347等）たり、体部内面のケズリ調整があまり器壁が厚いもの（357等）等、香東川下流域産甕とは異質な属性を認め、341 や器形に差異の著しい368・369等とともに、その模倣形態の可能性を考える。

364・371・372・374～378 は、くの字に外反する口縁を有する甕である。364 は、体部外面ケズリ調整を、内面は横方向のミガキ調整を施す。胎土中に角閃石粒とみられる有色鉱物を含むが、器形や調整技法は香東川下流域産土器にはなく、他地域からの搬入品であろう。371・372 は、細身の体部を有する甕で、若干量の雲母粒を含む。374～378 も、角閃石や黒雲母細粒を含み、在地産胎土に酷似するが、口縁部外面まで体部から連続するハケ調整が及び、体部内面は頸基部付近までケズリ調整が施される等、香東川下流域産甕とは製作技術等に違和感がある異系統の甕である。

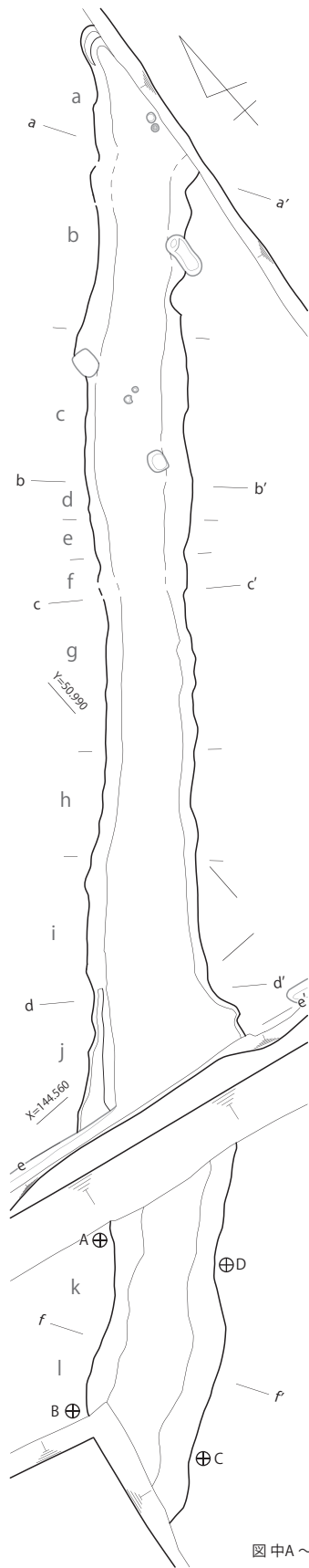
なお、口縁部を大きく上下に拡張する332 は、小片でもあり広口壺か後期初頭以前に遡る資料の混入の可能性を考えたい。

384～390 は、やや突出した平底を有する甕の底部片である。386 の底面中央付近には、焼成後に外面側より径5mm程度の円孔が穿たれる。底部の器壁の厚い389 や、胎土中に多量の角閃石粒を含むものの、底部内面に指頭圧痕を加える390 は搬入資料であろう。

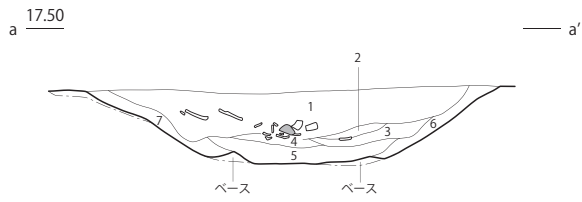
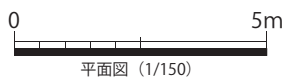
391～443 は高杯である。391～399・401・403～408・410～415・418～420・424～425・427～442 は、胎土中に角閃石粒を含む香東川下流域産の高杯である。杯部は浅く、上位で屈曲して立ち上がり、端部は内外もしくは外方へ小さく引き出す。脚部は、緩やかに外反して開き、端部はやや肥厚して、ヨコナデにより端面が浅く凹線状に窪むものが多い。杯部内外面は四分割のミガキ調整を施し、脚部には上下2段に3方向より小円孔の透孔を穿つ。杯部と脚部の接合に、円盤充填が認められることで共通する。同形態を共有する400・402・409・423・426 は、やや粗粒の黒雲母粒が目立ち、既述した甕同様その模倣形態の可能性を考える。

また、口縁部が緩く外反して開き、端部を矩形に納める416・417 は、胎土の点からも搬入資料の可能性が高い。角閃石細粒をやや多量に含む422・443 は、器形の点で上述した在地産土器と大きく相違し、これらも搬入資料であろう。直立した口縁部外面に、多条の凹線を施し、杯部内外面に放射状のミガキ調整を施す421 は、吉備系の可能性がある。

291・292・298・379～382・444～447 は鉢である。外反する小さな口縁部を有する小型鉢291・292・379・380 は、外面ミガキ調整を多用した精製器種で、角閃石細粒をやや多量に含むが、在地の組成には系譜を辿れない。292の内面には、赤色顔料が付着し、容器として使用されたと考えられる。砲弾型の体部を有する小型鉢381・382も、同様にミガキ調整を多用した精製品で、角閃石細粒を含むことでも共通する。本資料も、在地の組成のなかでは客体的な存在である。小型鉢にはそのほかに298と



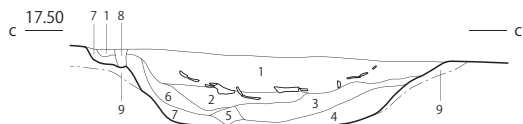
図中A～Dは第71図A～Dに対応



- 1 7.5YR4/1 褐灰色細砂質土
- 2 N3/ 暗灰色シルト
- 3 5Y2/1 黒色シルト
- 4 ベースブロック
- 5 2.5Y3/2 黒褐色シルト
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト



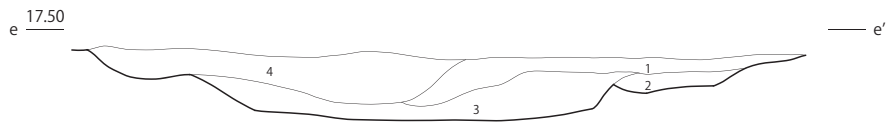
- 1 礫集中部
- 2 5Y2/1 黒色シルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト
- 4 8と同じ
- 5 2.5Y5/1 黄灰色シルト (Feが混じる)
- 6 10YR5/1 褐灰色シルト (2の土の小ブロックが入る)
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト (2の土の小ブロックが入る)
- 8 10YR6/6 明黄褐色シルト (ベース)



- 1 7.5YR4/1 褐灰色細砂質土 (Feが混じる)
- 2 N3/ 暗灰色シルト
- 3 5Y2/1 黒色シルト (ベースブロックが混じる)
- 4 2.5Y5/1 黄灰色シルト
- 5 10YR4/1 褐灰色シルト
- 6 3に同じ
- 7 4に同じ
- 8 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 9 10YR5/6 黄褐色シルト (ベース)



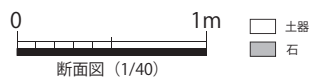
- 1 7.5YR4/1 褐灰色細砂質土
- 2 2.5Y3/2 黒褐色シルト
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト



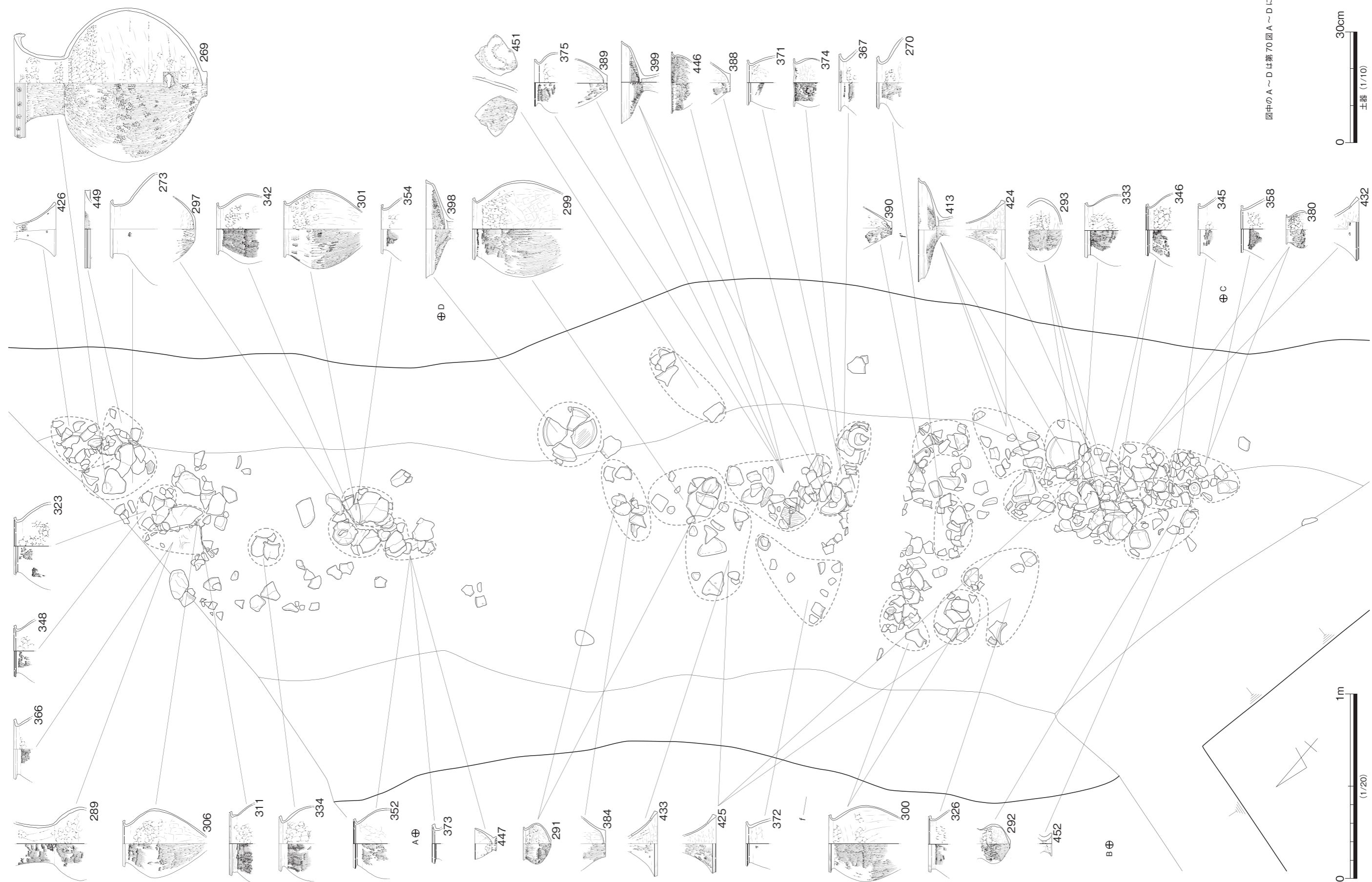
- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト (固い)
- 2 10YR5/4 にふい黄褐色シルト (固い)
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト
- 4 7.5YR4/1 褐灰色細砂質土



- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (Feを含む、φ~10cm小礫がやや混じる、遺物が多い)



第70図 SD301 平・断面図

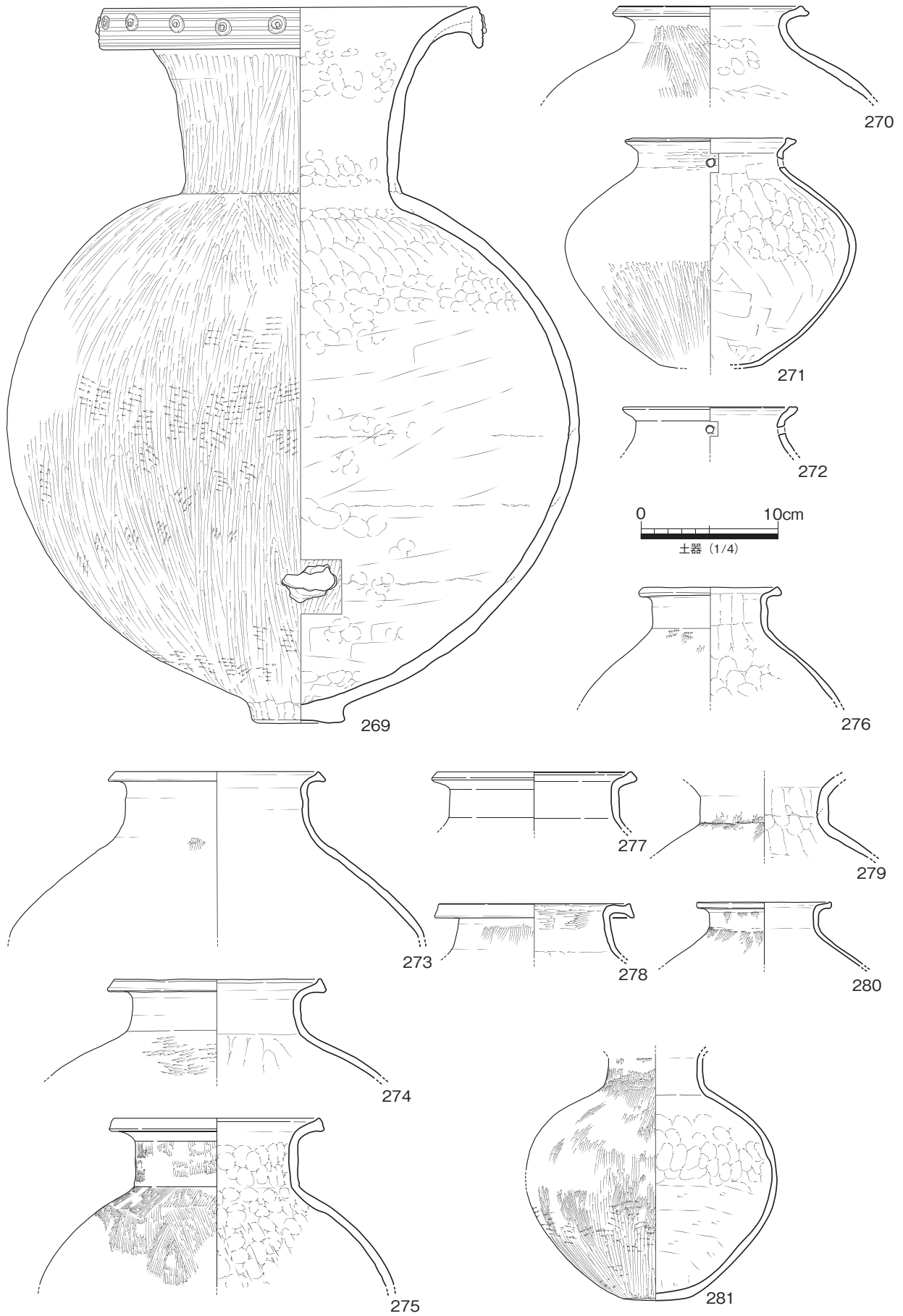


図中のA～Dは第70図A～Dに対応

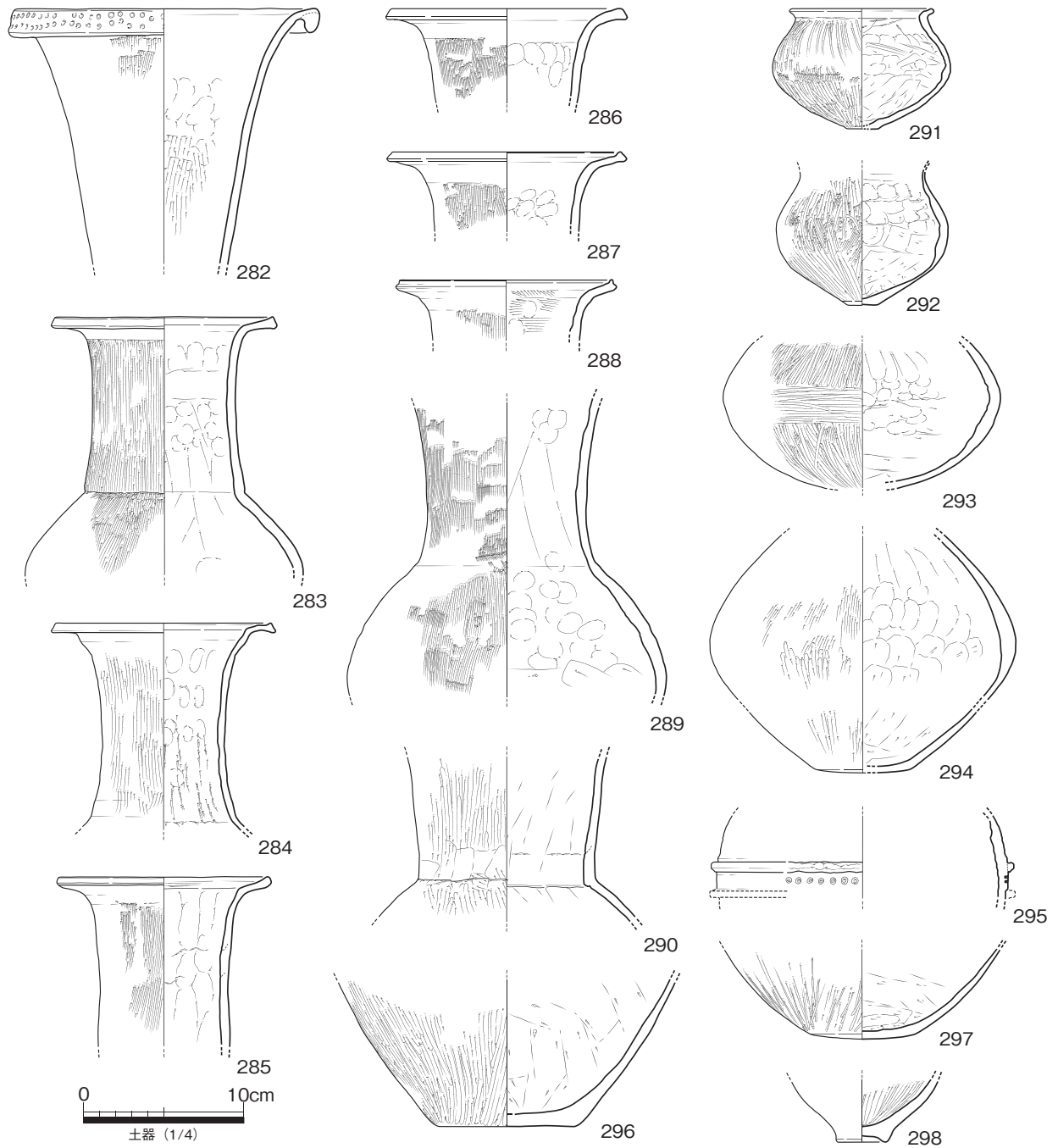
第71図 SD301 遺物出土状況







第72図 SD301 出土遺物(1)



第73図 SD301 出土遺物(2)

447があり、いずれも突出した上げ底状の底部が付し、胎土中に雲母粒をやや多く含むことで共通する。

中型鉢444は、口縁部が屈曲して僅かに有段口縁形態となる。内面はミガキ調整が多用される。外反する口縁部を有する中・大型鉢445・446は、体部外面ハケ調整、内面板ナデ調整後いずれもミガキ調整を加えることで共通する。また、444を含め、胎土中に若干量の角閃石細粒を含む点でも共通し、製作集団が同じであった可能性が高い。451は、大型鉢の体部とみられる土器片で、外面に逆U字状の把手とみられる剥離痕を認める。452・453は、製塩土器の脚台部小片であろう。

448～450は器台である。本地域では、本溝の段階をもって土製の器台はその組成から姿を消す。